

## 語言教学と文化

—日本語と中国語の初級教育における文化導入について—

陳 月 吾\*・唐 麗 燕\*\*

### LANGUAGE TEACHING & CULTURE

Cultural guidance in the primary teaching stage of Japanese and Chinese languages

Yuewu Chen and Liyan Tang

Language itself has its own cultural background. If we only teach students words and grammar rules in the language teaching, they surely can not communicate well with the native people. Thus the culture or the culture background of the country should be introduced in class. In order to let students know the commons and differences between Chinese culture and Japanese culture, so as to let them learn the foreign language well in a real sense in a comparatively short period of time, in this article, the meaning difference of words brought about by cultural barriers and the cultural contradictions occurred in the different living surroundings are investigated and studied in the primary teaching stage of Japanese and Chinese language.

#### ( 一 )

「言語」と「文化」が切っても切れない関係があることは、すでに現代の言語学者と言語教育者に広く受け止められているところである。語学教育において言語と文化の関係はますます重要視されてきている。言語と文化を結び付けて研究することは19世紀前半から人類学者によって始められ、20世紀の40年代から、旧ソ連でも、アメリカでも外国教育において文化要素が重要視され、60年代の中期以降本格的な学科になった。60年代中期に異文化交際学(Intercultural Communication)がアメリカに出来た。国際異文化交際学会は1972年に創立され、東京で第一回異文化交際国際シンポジウムが行われた。旧ソ連では70年代にイデオロギーと係わり合って対外ロシア語教育のなかで「言語国情学」が創生された。その「言語国情学」は所謂交際文化として、言語能力における文化背景としての知識を教える科目である。中国では、50年代の初頭に言語学者の羅常培先生が『語言与文化』という本を著わし、言語と文化の関係について詳しく論述した。その後80年代の始めには陳 原先生が『語言与社会生活』『社会言語学』を著わして、更に言葉と社会、言葉と文化について研究を深めた。

私たちは、だれでもある特定の文化の中で生まれ育つ。私たちが使っている言葉はその特定の

---

\* 教養部 \*\* 福井大学修士課程在学

文化の中で生まれ、その文化の中に存在し、それと同時に文化伝達の媒体でもある。もし語学教育の目標が正しいセンテンスを生成することだけであるならば言語、つまり発音、語彙、文字を含む文法能力を教えるだけで十分であろう。外国人にこの能力があれば、センテンスを作り、それによって外国人とのコミュニケーションを行い、外国の社会でも正しく行動できるはずである。しかし、学習者が正しいセンテンスを作れるようになったとしても、それが相手国の文化と合わなければ聞き手が一体何を言っているのかさっぱり分からないという苦言がしばしば耳に入ってくるのである。外国語を使って外国人とコミュニケーションをしている時、自国の思考方法と発想により母国語の中の社会や文化的な背景を機械的に当てはめて、交流を妨げたり、失敗させたりすることがよくある。大分前のことであつたが、筆者の大学にきた60代の日本人教師が歓迎会で同じ年輩の通訳さんに頻繁に「食べなさい。」「食べなさい。」と言われて癪に触ったというのを何回も聞かされた。中日両国は同じく東方文明圏に属しているし、同じく漢字圏に属しているが、それぞれの歴史、自然、風土、人情が異なり、それぞれの文化背景を持っているのは当然である。例えばこちらでは常識だと思っていることが相手には非常識だと思われるかもしれない。またぜんぜん問題はないと思っていることがトラブルになる場合もある。どちらが良いとか悪いとかは言えなく、相手国の言語を習う人はその国の言語だけではまだまだ不十分であり、必ずその言語の生まれ育った文化を尊重し、その文化背景を習得することが必要であると思う。J.V. ネウストプニー氏が指摘したように、「言語を場面的に正しく使うという能力は、普遍的なものでもないし、自動的身につくものでもない。やはり、これを教えなければならないのではないか。」<sup>注①</sup>筆者は中国人を対象に日本語、日本人を対象に中国語を教えている際、初級段階では次の幾つかの場面において、それぞれの文化を導入することに力を入れてきたのである。

## (二)

### 1、 語意とその文化的背景

前に述べたように言語はその国の文化の中で誕生し、その国の文化そのものであり、その文化を伝える媒体でもある。言語そのものの三要素（語彙、音声、文法）の一つである語彙は特定の社会文化の中で、特定の語意限定や感情的色彩及び歴史的、文化的な連想を持つことである。中国語又は日本語を習う初心者たちに言葉の語意とその文化背景をきちんと教えないと理解できないのである。

#### 1-1、名詞の中で目立っている「先生」

名詞の語意の相違と言うと、中国語の“女儿”は日本語では“娘”であり、中国語の“娘”は日本語の“母親”になるが、中国語の“信”は日本語では“手紙”であり、中国語の“手紙”は日本語では“トイレットペーパー”などなど数え切れないが、普通使用頻度が高く、コミュニケーションに障りのあるのは“先生”と言う言葉であると思う。中国に行ったことのある日本人成年男性はたぶん中国人に「〇〇先生」と呼ばれた経験があるであろう。それに中国人と日本人の会話の場面を想定した日本の中国語のテキストにも「〇〇先生」は呼び方としてよく出てくる。日

本語の中の「先生」は教師、医師、弁護士、議員や政治家などの特定の職業の人だけを指すが、中国語では昔は教師、漢方医の医師を尊敬した呼び方であったが社会変化につれて、普通の教師を「老師」、医師を「医生」又は「大夫」と呼ぶようになった。しかしインテリ層の知識豊富な長老が「先生」とか「老先生」と呼ばれるだけでなく、あらゆる成年男性を尊敬して呼ぶことがある。特に外国人や名前の知らない男性を尊敬する呼び方としてよく使われている。それに他人か自分の夫の呼称としても使う。男性を尊敬する呼び方の「先生」は、日本語の「〇〇 様」に当たるのである。こういうことが分かれば中国人に「〇〇先生」と呼ばれても、不愉快にならなくて普通の気持ちで受け取れるであろう。それと同時に日本語を習った中国人が日本人の成年男性に会っても、だれかれとなく「〇〇先生」とは呼ばないようにすべきである。

#### 1―2、代名詞

「あなた」は第二人称の代名詞として使われるが、小学館の『日中辞典』には「あなた」1、（目上、年上の人に）您、（同輩、年下の人に）你。2、（妻が夫に）你のように載せているが中国の初級段階の日本語教科書には殆ど1の意味の「你、您」しかない。1952年日本国語審議会の建議として出された『これからの敬語』には、対称を表わす言葉について次のように述べられている。

（1）「あなた」を標準の形とする。

（2）手紙（公私とも）の用語としてこれまで「貴殿」「貴下」などを使っているのもこれからは「あなた」で通用することにしたい。

（3）「きみ」「ぼく」はいわゆる「きみ」「ぼく」の親しい間柄だけの用語として、一般には「わたし」「あなた」を使いたい。

しかし、約50年経った現在、「あなた」の使用はこの建議通りにはなっておらず、日本の実際の生活のなかでは上の『日中辞典』に載せられている意味の“2”の使い方のほうがむしろ多いようである。しかし、中国の日本語の初心者たちには分からなく、日本の異性と話すとき頻繁に「あなた」を使うことがよくあって相手をびっくりさせる。

#### 1―3、数詞

数字はもともと物を数える単位であるが 一部の数詞は長い歴史の中でだんだん単に物を数える単位ではなくなり、深い文化的意味合いが与えられた。昔中国では「四」は「四季発財」（年中商売繁盛）、「事事」（南部の訛りでは「四」と「事」の発音区別無し）如意」（万事順調）の感情的色彩があるから喜ばれているのに対して、日本語では「死」の発音と同じで嫌われている。

「九」は中国では階級の高いシンボルであるが、日本では「苦」の発音と同じであるから嫌われている。改革開放されて以来、台湾や香港などの商人たちの考え方の影響で「六」（六六大順）と「八」（広東あたりの方言では儲かるの意味の「発財」の「発」の発音に似ている。）が喜ばれている。特に電話番号や車の番号の最後の数字が「八」なら商人たちに大いに喜ばれる。かつて六桁の「八」の電話番号が普通の数字の何千倍もの価格で落札されたという話もあった。日本では「八」が好まれるが、それより「七」のほうがもっと喜ばれるようである。それに日本人の

年輩の方は5円（ご縁）、15円（十分ご縁）、45円（始終ご縁）を賽銭箱に入れるのも好きであるし、お土産の財布に入れるのも好きである。日本語では数量が一つなら、誤解されない場合は殆ど明記しないのに対して、中国語ではよくはっきり言うのが習慣である。例えば、初級中国語の教科書には次の会話がある。A：「你想喝点儿什么？」B：「我现在不渴，什么都不想喝。」A：「老同学别客气，来一杯咖啡吧。」注②日本語に訳すると A：「何か飲みたいですか。」B：「今は喉が渴いていないので何も飲みたいありません。」A：「昔の同級生だから遠慮しないで、コーヒーを飲みましょう。」になる。その外に中国語には幾つかの特定数字の組み合わせに意味があるので、日本人の中国語の学習者に教えておいたほうが良いと思う。「250」（“二百五”に読む）「10点」は阿呆、頭が可笑しいという意味なので中国人にこう言ったら怒られるかもしれない。

#### 1-4、形容詞と形容動詞

先ず中国語には形容動詞という品詞がないことは中国語を習う学習者に既に知られているが、問題は中国人の日本語学習者がよく感情や感覚を表わす形容詞と形容動詞の使い方を間違えることである。例えば「嬉しい」「嬉しいがる」は同上の『日中辞典』には「高兴，快活，欢喜」と書いてあるので、「彼がとても嬉しい」のような文を人称問わず平気に使う人がかなり多い。日本語の感情や感覚を表わす形容詞と形容動詞は現在の状態の場合、話し手の心のうちを表わすだけであり、第三者の心のうちには何か特別な形式で表わさないと外の人には分からないであろう。それで「形容詞と形容動詞の語幹+がる」「形容詞と形容動詞の語幹+そうだ」「形容詞と形容動詞の過去式」などの第三者の言い表わし方がある。初級段階で学生たちにちゃんと教えないと上級段階になってもよく間違える。というのは中国語には「他今天非常高兴。」（今日 彼はとても嬉しいがっています。）のような文はよく使われるのである。中国の学生たちは中国語の発想によって「今日彼はとても嬉しいです。」のようによく言うのである。

#### 1-5、自動詞と他動詞の誤用

どこの言葉にも自動詞と他動詞があるので、難しくなく特に指導しなくても良いと思われる人が多いかも知れない。実はそうではないようである。中日両国の人たちの客観現象に対する視点はかなり違うのである。「行く」「来る」「参加する」「出席する」「帰る」「戻る」「入る」「経る」のような移動や加入を表わす動詞は自動詞であり、その移動先と加入先は連用修飾語である日本語に対して中国語では皆目的語である。例えば：会議に出席する（出席会议）。米原を経て東京に行く（经过米原去东京）。日本語の多くの動詞は語尾が少し違うだけで自動詞と他動詞に区別されるので、日本語を習う中国人は大変間違いやすいのである。例えば、「始まる」と「始める」は中国語で言えばいずれも「开始」であるが「八点钟开始上课」を中国の学生たちに日本語に訳してもらえば、「始まる」を使ったら良いのか、それとも「始める」を使ったら良いのかよく迷うようである。

## 2、 歴史や生活環境による文化の違い

われわれが母国語でコミュニケーションをする時、同じ社会、同じ文化的環境で暮らしていても誤解や摩擦が全然起こらないとは限らないであろう。外国語で文化背景の違う人とのコミュニケーションはその誤解や摩擦は避けられないと思うが、お互いに積極的に相手国の文化を尊重しあったり、習いあったり、理解しあったりすることによって、異文化の摩擦を最低限にすることができると思う。

2—1、日本は海に囲まれ四季がはっきりしていて、景色が素晴らしい。こんな優れた自然に恵まれている日本人は、自然と関わる中国や欧米諸国の自然観と違って昔から自然が好きであり、自然との共存をずっと求めてきた。違う自然観によって出来た言語文化もまた違う。“刮风”，“下雨”，“打雷”など自然現象は、中国語では他動詞と目的語であるが、日本語では「風が吹く」

「雨が降る」「雷が鳴る」は主語と自動詞である。この違いについて中国人の日本語学者の胡振平氏が指摘されたように、世界は神様によって造られたのではなく自然に成り、人間もその自然の中の一部であると日本人が思っているので、“刮风”，“下雨”は自然現象である。それに対して中国人は自然と関ってきたため、人間は必ず天に勝つという信念が固いので“刮风”，“下雨”は他動詞と目的語である。手紙は時候の挨拶から始まり、日常生活の挨拶も「今日は良いお天気ですね。」「だいぶ暑くなりましたね。」など天気の変化が一位に置かれていることは中国語にはないし、他の国にもないであろう。中国では長い歴史のある農耕文化なので、昔から「民以食为天」と言われて庶民たちにとっては食事は何よりも大事であった。だから昔隣同士や知人が対面すると「吃过了吗?」（食事は済みましたか。）と挨拶してきたが今は都会では一般の人々にとっては飲食は問題にならないので挨拶も知らないうちに「你好!」（こんにちは。）、「忙吗?」（お忙しいですか。）などに替わっているのである。

2—2、日本は島国のうえに何千人かのアイヌ民族の他殆ど大和民族であるので、お互いに理解度が非常に高いのである。その文化の中で誕生した言語の特徴としては簡潔であり、曖昧である。日本人同士では相手がちょっとヒントを出せば、すぐ理解できるので話は終わりまで言う必要はない。それで“ちょっと、適当に、そろそろ、ぼつぼつ、どうも、まあまあ、一応”など物事を率直に言う中国人にとってはなんと難しい言葉であろう。敏感で理解度が高いので、曖昧のほか省略が多い。例えば、「それはちょっと……」「あのう、ちょっと……」「あ、べつに……」こんな省略された文を聞いた初心者の中国の学生たちはどうしても理解ができない。次はある中国語初級教科書の本文の一節であるが、日本語に訳したら下線を引いた言葉はほとんど省略されてしまう。

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| A: 「你对什么感兴趣?」 注③     | /A: 何に御興味がありますか。     |
| B: 「我对汽车和摩托车感兴趣。」    | /B: 車とオートバイです。       |
| A: 「你真了不起!」          | /A: ほんとに大した物ですね      |
| B: 「你爱好什么?」          | /B: 何がお好きですか。        |
| A: 「我爱好弹电子琴, 玩电子游戏。」 | /A: エレクトーンとゲームが好きです。 |
| B: 「真羡慕你。……」         | /B: ほんとに 羨ましいですね。    |

しかし、中国語の内の“关联词”（接続詞）の省略は日本語を習う中国人と中国語を習う日本人にとっては大変難しい。前の例文「老同学别客气，来一杯咖啡吧。」（昔の同級生だから遠慮しないで、コーヒーを飲みましょう。）の“老同学”と“别客气”の間に因果関係があるが、その因果関係を表わす中国語の“关联词”（接続詞）——“因为”“所以”は文脈によって省略された。もし書き入れたら「因为是老同学，所以你别客气，来一杯咖啡吧。」になるが特に強調しようとする場合でない限り、普通こんな風には使わないであろう。それ故に因果関係の“关联词”（接続詞）を省略するのは中国語の基本的原則であると言える。日本語では文脈によって主語や述語などがよく省略されるが、接続詞や接続助詞などはあまり省略されないようである。例えば、「来迟了，对不起。」（遅れてすみません。）「出了星星，明天也许是个晴天。」（星が出ているから明日も良い天気でしょう。）その外に中国語では仮定関係を表わす“关联词”（接続詞）——“如果”、“即使”、“假如”なども省略される。例えば、「有什么事也没有关系。」（どんなことがあっても構わない。）「你去我也去。」（あなたが行けば私も行く。）などは中国語又は日本語の初心者たちに教えておかないと理解出来ないであろう。

2—3、相手の気持ちを大事にする日本人は「きれいですね」「素晴らしいですね」「素敵ですね」など相手を褒めたり称えたりする言葉がよく使われることに対して、「ノー」にあたる「いいえ」は褒められた時やお礼を言われた時以外にあまり使わないのであるが、「いいです」「結構です」「考えておきます」「それはいいですね、ちょっと……」など否定や拒絶の気持ちは遠回しに伝える使い方が好きである。例えば「先生は何時ごろお帰りでしょうか。」と聞かれた時は「そうですね。三時にならないと帰れないでしょう。」のような答えは極普通であろう。人を誘う時も人に頼む時もよく否定を使う傾向がある。「お茶でも飲みませんか。」「なにか飲みませんか。」「どこかへいきませんか。」「ちょっとご説明いただけませんか。」「それを貸してくださいませんか。」。大陸伝来の仏教や儒教などの影響を強く受けた日本人は、「和をもって尊しとなす」という精神を持っている。また、四面海に囲まれた日本にとって漁業は必然的に重要な生活手段であり、その漁業は本質的に集団作業なので日本人は集団意識が強い。その集団の秩序を乱すことをよしとせず、人と接する場合もなるべく角をたてず、人間関係をスムーズにするように、なるべく相手に不快な感じを与えることを避けてきたのである。しかし、中国語の場合はそれと反対である。前の例文の引き続き：A：「老同学别客气，来一杯咖啡吧。」B：「不，我不喜欢和咖啡，还是喝茶吧。」を日本語に訳すと A：「昔の同級生だから遠慮しないで、コーヒーを飲みましょう。」B：「いいえ、わたしはコーヒーを飲むことが好きではなくて、やはりお茶にしましょう。」になる。このように中国人ははっきりと否定するのである。昔から「有话直说」（ありのままに言う）が美德とされ、「直爽」「爽快」「直率」（率直）などは人柄や性格を評価する時によく使われる褒め言葉である。だから中国人は「你今年多少岁？」（今年お幾つですか。）「多少钱一个月？」（月給はお幾らですか。）「你丈夫（妻子）干什么工作？」（御主人（奥さん）はどんなお仕事ですか。）などかなりプライベートなことを平気で警察のように聞く。こんな年齢や収入などのようなとんでもない質問を中国人の間では何故平気とするのであ

ろうか。中国は日本と違って、国土が広く、民族が56もあるので同じ事でも所や民族によってだいぶ違う。物事をはっきり言わないと理解出来なくて誤解あるいは民族紛争まで起こる恐れがある。それゆえに中国人は物事を率直に言う民族性になっているのである。前に述べたように日本人が相手の気持ちを大事にするもう一つの現象は、日本人同士の会話はいつも積極的に相手の相槌をするのに対して中国人は殆どしないのである。日本人はどんなに中国語が上手でも話し合うとすぐ日本人だと分かるのである。それが日本人の独特な話の相槌なのであろう。

日本人は物事を遠まわしに言うのが好きで断定的な言い方を避けているが、中国人は逆に断定した言い方が好きである。たとえば風邪を引いて病院でいろいろと検査したり、診察したりした後、中国のお医者さんは「感冒了。」という診断結果を断定的に言うのが普通であるのに対して、日本人のお医者さんは「たぶん風邪でしょう。」、「風邪をひいたようですね。」、「風邪をひいたらしいですね。」などのように推量形で診断結果を言われるであろう。それに天気予報についても同じように中日両国の言い方がまったく違い、中国語では断定的に日本語では推量形で言う。次の天気予報「今天晴转多云，南风3级，今天最高气温36度，最低气温25度，降水率10%。」をそのまま日本語に訳すと「今日は晴れ後曇り、南の風3メートルです。今日の最高気温は36度、最低気温は25度です。降水確率は10%になります。」になる。日本の天気予報では「…でしょう。」、「…そうです。」、「…の予測です。」、「…の見込みです。」など推測になるのである。

### (三)

以上は筆者が長い間中国人の日本語教育又は日本人の中国語教育をする初級段階で、言葉を教えながら文化も紹介することに力を入れてきたが、まだまだ不十分であると思う。「文化」というものは言葉表現のどこにでも窺われるものである。或いはその言葉を支えているものとも言える。言葉表現に表わされた文化は意識的にやっているわけではなく、その国の人々の心に溶け込んで、潜在的な意識の現れである。それ故に日本語又は中国語を教える時、意識的にその言葉の表現の中の文化を伝えることが大変重要であると思う。

- |                 |             |       |       |
|-----------------|-------------|-------|-------|
| 注①J.V ネウストプニー 著 | 『新しい教育のために』 | 大修館書店 | P. 33 |
| 注②潘 洁、卞 惟行 共著   | 『初級中国語』     | 晃洋書房  | P. 33 |
| 注③魯啓華、卞 惟行 共著   | 『中国語第一步』    | 晃洋書房  | P. 47 |

#### 参考文献：

- |                |              |         |
|----------------|--------------|---------|
| 1、金田一春彦        | 『日本人の言語表現』   | 講談社     |
| 2、J.V ネウストプニー著 | 『新しい教育のために』  | 大修館書店   |
| 3、中国日語教学研究会選編  | 『中国日語教学研究文集』 | 香港信通出版社 |

(平成13年12月5日受理)